



¡MÉXICO MÁXICO!

メヒコ マヒコ - 魅惑の国メキシコ - Feb. 2018



【Vol.6】モダニズム建築の宝庫と新スタート

キャンデラ作 Medalla Milagro 教会



モダニズム建築 & 空飛ぶ SF 図書館

メキシコと言えば古代遺跡が有名ですが、じつは近代建築でも注目されている土地です。特に建築界のノーベル賞〈プリツカー賞〉を受賞したルイス・バラガン(Luis Varragan: 1902-1988)は、名前を知らなくてもキューピーマヨネーズのCM等で作品を目にしたことがある人も多いのではないのでしょうか。バラガンの他にも、曲線を多用したフェリックス・キャンデラ(Félix Candela: 1910-1997)や、高松宮殿下記念世界文化賞を受賞したリカルド・リゴレッタ(Ricardo Legorreta:1931-2011)といったメキシコ人建築家の作品がシティで見学できます。

そして現代建築では、“空飛ぶ図書館”と密かに呼んでいるバスコンセロス図書館(Biblioteca Vasconcelos)が一見の価値あり。書架が天井から吊り下げられている構造はアルベルト・カラチ(Alberto Kalach: 1960-)による設計で、2006年の竣工以降、多くの建築雑誌等でその先鋭的なデザインが取り上げられてきました。

この図書館は内部のビジュアルが注目されていますが、アート系の蔵書も大変充実しています。嬉しいことに、多くが開架にあるため調べ物の際にカウンターへ資料請求をかけなくて済むので、個人的にはとても使い易く助かっています。



空飛ぶバスコンセロス図書館

モンテ・アルバン遺跡@オアハカ州

新スタート：保存修復コースへ

CONACYT(国家科学技術審議会)から許可を頂き、2月からUNAM 芸術学部(FAD)のディプロマコースへ入学できることになりました。専攻は文化遺産の保存学で、念願だった保存修復管理について学んでいきます。

昨年末よりポートフォリオ等の提出書類を準備し、先日の面接を経て無事に合格。面接直前まで準備に追われる中、メキシコだな〜と嬉しく思ったエピソードが、お店で書類の印刷をしたりしていると、店員さんや他のお客さんから「¡Suerte(幸運を)!」とよく声を掛けてもらっていたこと。

面接当日は本当に憂鬱でしたが、こうした場面に救われ緊張が和らぎました。とは言え面接では、モチベーションや専門用語について自分の意見を求められ、接続法のオンパレード。CEPEのオーラルテストより遥かに緊張した数十分間でした。

このコースでは約6ヶ月間、文化遺産に関する資料保存科学や展示学などを学ぶ予定です。特に楽しみにしているのが文化資源の運営手法。VRIO分析やSWOT分析といった経営フレームワークを基に、〈保存〉と〈活用〉という相反する役割のバランスをどうとっていくか?を同期のメキシコ人達と議論していきます。



ウシュマル遺跡@ユカタン州

メキシコらしい彩色豊かな家も健在



面白いのが、この家では相手を Usted(あなた)で呼ぶこと。メキシコでは相手を Tú(君)で呼ぶことが多いので最初はとても距離を感じ、何か無礼をしたのかも...！とドキドキしていたのですが、コロンビアでは親しい間柄でも Usted を使う文化だそうで、決してよそよそしくしている訳ではないそうです。安堵。

呼び方以外にも、メキシコ言葉とコロンビア言葉の噛み合わない会話で笑ったことが。帰宅時に Hola, ¿qué más?(やあ、他に必要なものある?)と突然聞かれ、怪訝に Nada(何もないよ)と答えたところ、¿Cómo estás?(調子はどう?)のスラングだと教えてもらったことがあります。同じラテンアメリカ地域でも国によって単語の意味がまったく違うので、これから笑いの種がたくさん発見できそうです。

引越しとメキシコ&コロンビア言葉

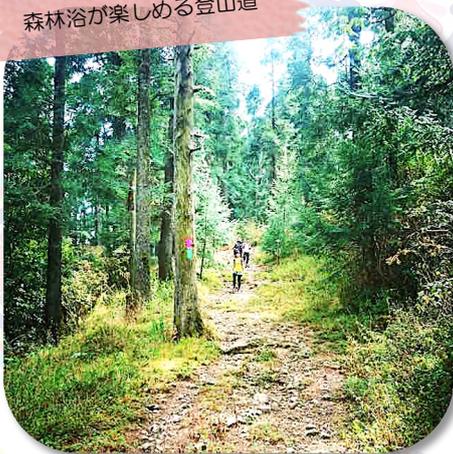
FAD への申請と並行して 2 度目の引越しをしました。この研修の最大の試練と言っても良いのではないかとと思うくらい契約関係で心折れかけましたが、最終的に決めたデパルタメントは、コーヒーラバーなコロンビア人医師ジョンと韓国ドラマ好きなメキシコ人栄養士ピアネイとのルームシェア(Roomie)で、ラテンアメリカ式のハグ&頬キス挨拶と、時間が合うときは夕食を共にしています。

手洗い洗濯から解放され、時間節約できるようになったのが一番嬉しい変化ですが、新しい家では大体どちらかが勉強していることが多いので、私もなんだか感化されそうです。自分への言い訳ができなくなりました。



メキシコ住宅の魅力は外観と内部の対比

森林浴が楽しめる登山道



CEPE クラスと週末ハイキング

今期の CEPE では文法クラスだけ取っています。内容も難しくなり、クラスでは先生の「Más o menos(だいたいわかった?)」の問いかけに「Sí, pero no~(はい、でもいいえ~)」で答えるのが流行中。休憩時間は、本来は蔑称ですが愛称にもなる〈名前+ucho/a〉で呼び合うクラスメイト達と、メキシコでビジネスをするには?について日々アイデア出し中。今のところ、コーヒーショップでチェーン展開が有力です。

先日の週末は、日墨登山部でメキシコ州にある Cuatro Dinamo へ登ってきました。2月の天気は Febrero Loco(変な2月)と言われるほど不安定ですが、雨にも降られず約5時間13kmの登山で大いに気分転換できました。

日本のファインアート@シティ

渡墨して驚いたことのひとつが、日本語を話せるメキシコ人が多いこと。青空市(Tianguis)のお兄ちゃんが日本語で鶏肉の部位を説明してくれたり、思いもよらない場所で嬉しい出会いがあります。ベジャス・アルテス近くにもシティの秋葉原街があり、サブカルがきっかけで日本文化に興味を持ってくれる人が多い模様。

シティでは更に日本のファインアートも受け入れられつつあります。例えば、先日まで国立写真美術館(Museo Archivo de la Fotografía)で開催されていた畠山直哉写真展「陸前高田」では、成人男性の次に家族連れが多く訪れていました。ともすれば写真作品はコンセプチュアルで難しい面がありますが、この空間では、鑑賞者が自身の感情と重ね合わせながらひとつひとつじっくり鑑賞していた姿が印象的でした。

Zócalo 横にある写真美術館入り口

